

り物せし折のことなと思ひつらねて、四方をのそめと、やみの夜なれは、いつもいづこもあやなくて、見なれし東山のかたちさへ見え、いと口おし、いなりにいたれと、また夜あくへうもなし。只一軒おきて、茶わかしたる家有ルに立やすらふ、さて藤の杜にてそやうやう曉に成ぬ、桃山のほとりにて与三兵衛もかへしぬ、豊後橋にて夜あけはてたり、川つらそこはかとなくきりわたりて、山のはやうやうあらはれ行ほと、いと哀也、きのふの朝ほらけのきぬきぬ思ひ出られて、いと袖のみしほれまさるに、大方の都のなこり、はたいはんかたなし、せめてけき、都の山のすかたをたに見てわかれんと思ひしに、夜の内なれは、かひなく過て、今かくあけぬる空は、はやや遠くへたたりて、つねにけちかかりし東山などは見ゆへくもなし、只あたこの山のみ、なをかはらぬ程に見えたるも、つねにはやや遠くて何共思はず、いなかのやうに思ひてのそみし峰の、今は京の山となかめられて、見かへりのみす。をくらつつみ（小倉堤）をはるはるとわたりて、長池・玉水など過るまで、なをかのあたこの山は、京のかたみに見かへされたり

七 安永五年（一七七六）五月六日

二条城番として在京中の篠本廉、萬福寺訪問の帰路伏見城跡より巨棕池を望む

京遊記述／紀行日本漢詩一 富士川英郎・佐野正巳 及古書院
平成三年
遊萬福寺

（中略）及辞出、日既過午、吾護台禁嚴出入、有時余恐晏乃還、經六

地藏、右折入山、是為城墟、登眺甚奇、宇水下隘巨棕之池、渺乎西、池多產蓴菜、古人或拳之、以對羊酪、或思之以棄官、明袁中老則品、以為唯花中之蘭果中之楊梅可異類作配、然其曰東不踰紹西不過錢塘江、以故世無知者、則華人乏於此物之可知矣、本邦州而在焉人而嘗焉、唯是古人所寵、余不敢默也、池幅員甚大、觀亦甚壯、長堤一帶橫截池中、洲渚坻島交乎左右者望之、若連轅縻纜与波上下、丘谷林藪榮迴面勢、凸乎重然凹乎鬱然、凡州南山川於是畢出焉、但茂松遮目為可恨耳、山根桃樹成麓一望極目所謂桃山也、花時壯觀可想、於是心口相誓曰、及時不觀花于此者、有如斯林、東崖先生嘗有金湯桃塢句へ先生豐公故壘桃花詩、叱吒時移霸業空、百年葵麥動春風、金湯變作桃花塢、遠近霞蒸千里紅、三復之、以致弔古之意、乃去既至新御香宮、或曰、宮処此尚矣、及豐公城焉而移之狼谷、後以神為崇而復之、然則今所謂旧者乃新而新實旧耳、一日之挙名実長反斯事雖小可以戒大焉

八 天明二年（一七八二）十月六日

上田秋成、奈良からの帰途小倉堤を経て伏見へ向かう。

山叢・上田秋成全集十一 歌文篇二 上田秋成全集編集委員会 中央
公論社 一九九四年

井出の里過るほど、雨しきり也、玉水はわか笠のしづくにそなかめらるる、長池と久世のあひたを、くせの驚坂也と云、いまは畑にひらけたれと、猶をちこちゆくてにも木立のおほくて、神代のままに、春ははり秋は散かひつつ、古ことの葉のいつはらさりけり、雲のむらむらもやや立わかれて、雨もをやめる夕くれに、おほくら（巨棕）の江の堤ゆく、いと目さむる所也、右手は入江の波静にて、宇治のをちかた

まで、めもはるはると見たさるる、ひたりは淀野の沢よ、海原なし
て、とほろくかきりなきころす、山崎につつく峰々、雨の余波の
打霞むさへに、夕雲の立なひきて断続の峰をなすと云から歌、思ひよ
せらる、むかふ高嶺よ、あたこの山なるへし、宇治山黒う繁りたるに、
しろき雲のそひきたちて面しろ、伏見の田井をすみかふとか、落る雁
かね、をし鴨のたちいる羽音、入江に響きてすさまじとそきく、芦の
葉かけに、むらきみらか家ともむつかしけなる、水、孤村を抱くとは、
かかるをこそ、あしろ木にいさよふ波のさやめくは、いさり船のこき
てかへる也、かれもこれも、いたつらに見過すへからぬなかも也けり、
ある人のいへるは、もろこしの西湖といふも、たたここの見たしは
かりなるに、かれは宮ひたる事共を造りそへし物そと、さるは、今ゆ
く中道は、蘇子瞻か造りし堤とも云へし、けにも人に衣冠粉黛もけさ
うあり、勝地に花柳殿台のなかめをそふるには、柳か枝に花さくらを
もさかすへし。さるいろ香をもからてよ、すすろにあはれと思ひしめ
るは、此夕くれの心すさひにこそ

つつみもて家にもかもなおほくらの入江にうかふあまのつりふね
なにはの浦人かおもきくち網にはうちいつへくもあらぬを、ゆくゆく
江によほひし人もしはしなくさむは、この言のはあそひになんあ
る

天明二年冬十月

九 天明三年（一七八三）三月二十四日

高山彦九郎、奈良より小倉を経て京へ向かう。

天明京都日記・高山彦九郎全集2日記篇一 萩原進・千々和実 高

山彦九郎遺稿刊行会 昭和二十七年

二十四日、晴る、長池の宿りを立ちて、寺田・久世・広野新田□□
□□拍子に至る、長池より□□□□良へ六丁斗にして□□□□坤二
里にして八幡宮、大池目下に見ゆ、三里四方斗に見ゆ、小倉の池と
もいふ、一口といへる里も其ノ辺りに有り、小倉の里此辺宇治に近き
故茶を多つく作る、よしつ□を以て覆ひをせり、小倉堤去年の洪水ニ
所江切れたりといへるによりて便船に乗して大池を出ツ、大池沓里四
方と号す、西に人家多つく見へたるに□一口といへり、□□□□り八
幡山・淀の□に見へたり、山崎山、其レより北に見ゆるは吉峯、同愛
宕山、丑の方に比叡山、北に伏見の城跡、其ノ東に続きたるはおぐる
江山、東に当りて醍醐山、其ノ南に續きて黄檗山、南に遠く生駒山、
今日は霞みて金剛山は見へず、風景よし、小倉堤南北沓里にして中程
目川とて家六軒有り、堤ハ大池の中にありて東西共に池の切戸へ上る、
舟に乗れる事三十丁斗り、向ク嶋に至る、町家あり、是レも池の内也、
農紋橋（豊後橋の誤りか）は向□□の間に懸る、百四間半とぞ、舟に
て渡る、大池鯉鮒の類イ漁人捕りて京へ売る、またもろこなる小魚を
捕りて鳥の餌にして売る、是レを小倉の生餌といふとぞ、小坂を登り
て右に常磐井石の井筒也、太閤秀吉の遣はれたるよし、長池より豊後
橋迄三里有り、御香の社を左にして桃山を経て藤ノ森の社南に向ふ

一〇 寛政元年（一七八九）二月二十八日

司馬江漢、奈良より小倉堤を経て伏見にいたる。

江漢西遊日記／『日本庶民生活史料集成』二 三二 書房 一九六

九年

廿八日 曇る、(奈良) 椿木町古梅園へ参り、天覧の墨を見る、亦墨の形を見る、妙工なり、夫より南都を出て七里、伏見に至るに、其路小倉堤あり、是は京より南都へ宇路(宇治)を廻りては遠し、堤湖の半にあり、太閤之を築しとぞ、岸々に疎柳を植、柳キ篋を作る、堤長さ三十町、其半に漁村両三軒あり、京町近江屋に至る

一一 寛政元年(一七八九)二月三十日

司馬江漢、伏見宇治見台よりの眺望を楽しむ。

江漢西遊日記／『日本庶民生活史料集成』二 三一書房 一九六

九年

三十日、雨やむ、曇る、隣家九兵衛と云人、亦佐兵衛と共に、宇治見台と云所へ登る、太閤庭の跡と云、其行路を昔シ大和街道と云、今は左右畑なり、其畑の名あり、鍋島、黒田と呼ふ、古への屋しきの跡と見ゆ、其畑のウネウネに梅桃を植て、其比梅の花さかりなり、台より見下せば皆梅村、小倉の沼堤、向ふ方は春日山、八幡山、遥は吉野の方金剛山を望む、左は黄檗山、宇治の方なり、台を下れば御香の宮とて、鎮守なり、門は古への台所の門と云ふ、画馬堂に大釜に菊桐の紋あり

一二 寛政元年(一七八九)三月一日

司馬江漢、宇治の帰途小倉堤を通る。

江漢西遊日記／『日本庶民生活史料集成』二 三一書房 一九六

九年

三月朔日 天氣寒し、宇治の方へ行くに、宮の前を通り、梅畑を過て、

城址を左に見て行くに、六地藏小畑(木幡)村を過、黄檗山に至るに、入口門に第一義と云額、山門に万福寺、本堂に大王殿、裏に威徳莊嚴と在、雪峰沙門即非敬書。誠唐めきたる処なり、夫より三室堂、橋寺、恵心寺、恵心僧都自作の像あり、寛仁元年六月十日卒す、今年迄七百七十三年になる、橋あり損す、舟渡し、即宇治河是也、渡りて松あり、扇の芝と云、左に釣殿、鳳凰堂、前に池あり、其上の瀬を山吹の瀬と云、此時大和廻りをせず、亦小倉堤へ出て、伏見京町に帰る

一三 寛政五年(一七九三)五月三日

窪木清淵、伊能忠敬とともに宇治を訪れる。

西遊日記／史料京都見聞記二・紀行2 駒敏郎・村井康彦・森谷

尙久 法蔵館 平成三年

三日黎明、(大坂より) 舟行七十里にして橋本に到る(中略) 山(石清水八幡宮)を下り木津川を超ゆ。即ち瀬河納する所の上流なり、其の大橋は此を去ること遠からず、十五里にして宇治に到る、又た是れ郊原の村路なり、大瀨有り、広袤十許里、大池と号す、宇治川の匯りて大沢となるものなり、雨潦盈溢せば往々路を浸す

一四 寛政七年(一七九五)三月二十三日

小宮山楓軒(水戸藩士)、京を立ち小倉を経て奈良へ向かう。

寛政七年西遊記／随筆百花苑3 伝記日記篇3 森銑三・野間光

辰・中村幸彦・朝倉治彦 中央公論社 昭和五五年

廿三日 京師發途、伏見豊後橋ヨリ向島ヲ拝見シ、小倉堤ヲ過、奈良

坂ヲ登、般若寺十三重石塔ヲ観ル、笠卒都婆ヲ搦ル、小刀屋伊兵衛二宿ス

一五 寛政十一年（一七九九）三月八日

山領利昌（鍋島藩士）、江戸よりの帰途伊勢参宮し小倉を経て伏見にいたる。

大和路日記／近世紀行日記文学集成2 津本信博 早稲田大学出版部 平成六年

長池・巨椋などいへるさとざとをへて伏見の駅に着ぬるは八日の夕つかたになむ

一六 享和元年（一八〇一）三月十三日

石塚龍磨（国学者）、竹村尚規らと吉野行きの帰途宇治を訪れる。

花のしら雲／碧冲洞叢書第一四卷（第八八輯・第九三輯） 梁瀬

一雄 臨川書店 平成八年

十三日 宇治のかたへさしてゆく、八幡より百丁ありとぞ、ふご（封戸）のわたりといふを船してわたる、木津川の川下也、やはたより五六十丁ばかりや来つらん、大蔵（小倉）の里の入江を左に見つつゆく、宇治にいたりて、平等院にまうづ

一七 文化十一年（一八一四）四月十六日

木下幸文（歌人）、宇治を訪れ泊まる。

木下幸文日記／京都の桂園派歌人たち 兼清正徳 山口書店 一九〇年

さて豊後ばしを渡りて宇治堤にかかりぬ、右のかたにいと大きな池のみゆるは巨椋なりけり、かれは大和へゆく道なりとぞ
むかひ島、隠元の渡などいふ所を過てくるに、名にきく柴舟は見えず、男女のせたる舟ぞまれまれ下れる。

一八 文化十三年（一八一六）六月八日

某、伊勢・金比羅・厳島参詣の途次宇治を訪れ泊まる。

旅日記／史料京都見聞記三・紀行3 駒敏郎・村井康彦・森谷魁久 平成三年 法蔵館

三室戸に至り、十番札所三室寺観音を拝し、下りて宇治に行、此辺茶畑多く、また茶を製すること多し、道の左りにかげろふ石、三方に仏体有、左りに朝日山有、向に小倉の大池見ゆ、此中へ太閤の築し伏見よりの奈良海道見ゆ

一九 文政九年（一八二六）三月八日

斉藤拙堂（津藩儒官）、京都遊歴の途次宇治を訪れ泊まる

拙堂紀行文詩所収京華游録／紀行日本漢詩3 富士川英郎・佐野正巳 汲古書院 平成四年

八日、遊宇治、由東洞院、取路竹田、抵伏見豊後橋、川広可二町、水駛急、其東有大浸如湖、所謂巨椋池也、涉隄五十町許、達宇治橋、見郡吏高木知周、我蔑孳也、不見三四年、対飲飲甚、遂宿

二〇 文政年間（一八一八〜三〇）ごろ

松田直兄（賀茂の神官か）、吉野行の帰途小倉を経て伏見にいたる。

夢のしをり／日本紀行文集成4 日本図書センター 昭和五四年

(続帝國文庫続々紀行文集 岸上質軒 明治三四年の復刻)

長池、鷺坂など問ふまでもなく、往来の人も繁くて、都近き程知られたり

長池の水なきさともたまりつつ久世の鷺坂飛たちもせず

宇治山かげは如何ばかりならん、大掠里回(おぐらのさとわ)にもなべて茶をなむ製れるか、薫りたかし

降雨に打かをれるは少女子が摘ほどちかき木の芽也けり

蘆葉青みて江も亦見渡し佳し、水鳥の声もありしに異りて長閑に聞ゆ
鴛鴨はいにて静けきおぐら江の雨のあし間に鳩鳥の鳴く

夢人の伏見を過ぎ、都に入りて送りの従者返す

二二 天保九年(一八三八) 四月十三日

安田相郎(土佐藩士息)、上方見物の途次伏見より小倉を経て奈良へ向かう。

大和巡日記／日本庶民生活史料集成2 探検・紀行・地誌(西国

篇) 谷川健一 三一書房 一九六九年

四月十三日 薄日照

七時半時御供揃にて当地御発駕(伏見までは参勤交代の藩士たちに同行)、内匠殿にも今日は御行烈供にて出足、御見立に門前江迄出る、是迄数百人の御供賑々敷交り来りし処、御別の場合御国出立の節の心地して、何となくところよからず、夫より又旅宿に入寝候て夜明頃起出立、東野旅宿鳥渡相尋、夫より豊後橋を打渡巨椋堤にさしかかり、小倉の入江万葉集などにも古歌の見へたる名所、誠に大なる弘江也、

折ふし蛙など鳴、古歌の心を思ひ出られたり、向ひの方見渡壱里半計堤五十丁、左の方も又池にて、宇治川の堤迄二面の池也。右の方は遙に男山見へて、池のつまりは目もときかね、只樹木の際のみ見へて、人家なども目に不及、さなきたに是より壱人旅になり淋しかりしを、蛙の声の聞ゆるこそいとのさひしき心地す、是より新田村、猿(狼の誤りか)の茶屋、至て龜相なる小き茶やなり、此辺宇治の背合にて茶園など多し、寺田・長池など町柄よし、十六軒村・久世村、夫より玉水也、井手の玉水有し所故、町を玉水と言、此処を初貝原篤信か大和巡の記にもとづきて、名所古跡を拾ふ也

二二 天保九年(一八三八) 八月十六日

石瓦翁撰、上方見物の途次宇治を訪れ泊まる。

百たらずの日記／史料京都見聞記3・紀行3 駒敏郎・村井康

彦・森谷尅久 法蔵館 平成三年

十六日 快晴 (中略、石清水八幡宮より) やうやう未に近づくころ、宇治の方へとて出たちたり

封戸の渡しを越、沼の間をよきりて宇治の本町へ入る。

二三 天保十四年(一八四三) 九月二十四日

羽倉用九(幕府代官)、上方遊歴の途次、奈良より小倉を経て伏見にいたる。

西上録／紀行日本漢詩3 富士川英郎・佐野正巳 汲古書院 平

成四年

廿四日、早発(前日は多武峰泊、中略) 俣河下二十余里、出小倉御、

御周五十里、浅生蒲蓮多鱗属、中央長隄豊公所築、行隄十余里、抵伏見、訪府尹

二四 安政四年（一八五七）三月二十一日

中島広足、石清水八幡宮より巨椋池・宇治方面を眺める。

花のしたぶし／史料京都見聞記三・紀行3 駒敏郎・村井康彦・

森谷尅久 法蔵館 平成三年

廿一日（中略）くす葉村といふより右に入て、男山八幡宮にまうづ、山の西よりのほり、大前ををがみて、ところどころ行めぐり、東門よりいでて少しくだる処に、茶屋あるに休らふ、そのぞみいはむかたなし、木津川・宇治川のながれとほじろく、をぐらの池いとひろく見わたされて、淀の城はめのまへにあり、宇治のわたり、伏見の里より京のかたとほく見えて、山崎はただ此むかひにぞありける
やすらへる山べも山べ見えわたるころもといはむかたなし

二五 文久元年（一八六一）三月三日

近藤芳樹（国学者）、山崎観音寺より宇治・伏見・巨椋池方面を見渡す。

梅桜日記／史料京都見聞記三・紀行3 駒敏郎・村井康彦・森谷

尅久 法蔵館 平成三年

三日 雨ふる、けふは上巳のせちなれど、旅なればさる事もせでやどりを出ぬ、まづ神山にのほりて、雨にしをる花を見る、辰の時ばかりよりはれて風ふき出たり、長岡の社の池の辺にて水にちる花を見る、今日もまた桜狩にのみや日をくらさんと、打笑ひつつ、山崎路に出て

観音寺にまうづ、鳥井に寺号の額かけたるが珍らしきに目とまりてのぼれるなりけり、やや高き所にて、都の山々、宇治・伏見・八幡・大倉（巨椋）の入江、淀川の流なども一目に見渡されて、絵にもかまほしきながめなり

番号	資料名	年月日	備 考
136	永井飛驒守様御茶入日記	辰.5.吉	詰主奥山道古
137	永飛驒守様御茶入日記	巳.6.吉	詰主奥山道古
138	永飛驒守様御茶入日記	午.6.吉	詰主奥山道古
139	飛驒守様御茶入日記	未.6.吉	詰主奥山道古
140	飛驒守様御茶入日記	申.6.吉	詰主奥山道古
141	永飛驒守様御茶入日記	酉.6.吉	詰主奥山道古
142	神戸茶況日報 第廿一	明治 24.5.25	神戸茶況通信所
143	旧小倉小学校校歌 (小倉村歌)		版 版

番号	資料名	年月日	備 考
104	(書状)	4.28	塩飽屋清右衛門・同常七→肥後屋清兵衛
105	(書状)	5.1	筒井惣八→岩清兵衛
106	(書状)	6.2	筒井惣八→岩村清兵衛
107	一札(若殿落し物につき)	6.3	伏見御茶屋御用聞中→安武庄作・江口弥兵衛 包
108	覚(土瓶等)	10.5	伏見台所→
109	覚(土瓶等借用)	10.6	御台所浜田□次→御茶屋 包
110	覚(徳利等)	10.6	
111	(書状)	10.21	□田惣兵衛→肥後屋清兵衛 船賃等受取覚あり
112	覚(賄料受取)	11.7	御賄所→熊本藩以上三人
113	(書状)	12.22	木村茂八→岩村清兵衛 封
114	(銀高・名前書上)	肥後屋清兵衛他	
115	奉歎願口上之覚(松屋惣八一件)	塩常・塩清	
116	就御尋乍恐口上書(徒頭宿につき)		
117	覚(名前書上)		
118	山崎町海宝寺図		
119	新町勝龍寺図		
120	大手筋備後丁本教寺(境内図)		
121	永井飛驒守様御茶入日記	子.6.吉	奥山道古
122	永井飛驒守様御茶入日記	丑.6.吉	奥山道古
123	永井飛驒守様御茶入日記	寅.6.吉	奥山道古
124	永井飛驒守様御茶入日記	卯.6.吉	奥山道古
125	永井飛驒守様御茶入日記	辰.5.吉	奥山道古
126	永井飛驒守様御茶入日記	巳.6.吉	奥山道古
127	永井飛驒守様御茶入日記	午.6.吉	奥山道古
128	永井飛驒守様御茶入日記	未.5.吉	奥山道古
129	永井飛驒守様御茶入日記	申.6.吉	奥山道古
130	永井飛驒守様御茶入日記	酉.6.吉	奥山道古
131	永井飛驒守様御茶入日記	亥.6.吉	奥山道古
132	永井飛驒守様御茶入日記	子.5.吉	詰主奥山道古
133	永飛驒守様御茶入日記	丑.5.吉	詰主奥山道古
134	永井飛驒守様御茶入日記	寅.6.吉	詰主奥山道古
135	永井飛驒守様御茶入日記	卯.5.吉	詰主奥山道古

番号	資料名	年月日	備考
			問屋・年寄・庄屋中
75	覚(真菰等定請銀)	申.12.17	横田丹治・三輪源五右衛門→一口村庄屋方へ
76	乍恐以書付奉申上候(伊勢田村等銀子につき)	西.2.14	弾正町・一口村・小倉村→御奉行所様
77	(論所地改役人につき先触)	西.4.22	→東海道品川宿より小田原より熱海通り三島宿 ニ至り猶城州伏見迄右宿々問屋年寄中
78	(論所地改役人公用馬につき触)	西.4	豊後・主水
79	(仙洞御所崩御につき殺生停止触)	西.11.4	地方役所→漁師年寄江
80	(大納言薨御につき殺生停止等触)	亥.3.1	和泉→惣代
81	口触(家業の殺生差免につき)	亥.3.7	→惣代
82	口演(釣竿取上につき)	5.28	下京卅式校掛り区長→伏見六地藏村御当役中
83	覚(論所地改役人証文等送り状)	5.7	伏見問屋→論所村方御中
84	御山林方納(割賦書)	7.5	田守欽祐→弾正町平戸丁漁師仲ケ間
85	村送り一札之事	8.10	綴喜郡□□庄屋甚兵衛→向島下丁絵処勘兵衛
86	(御役所拝借銀受領書)		町方取締方→弾正町漁師仲ケ間
87	覚(公用人馬につき)		
88	(触書承知につき請書)		弾正町・伊勢田村外ニ式ケ村・一口村外ニ壺ケ村 ・小倉村→
89	乍恐御訴訟奉仕候(向島堤内漁につき)		
90	(郡界再調につき口上書)		
91	借用申銀子之事		
92	(宇治川・木津川・鴨川河川敷区画番号図)		
93	大池書類入 諸由緒書入		包紙
94	御帰国諸書付	文久2.3	御茶屋御用聞中 包紙
95	覚(借用金子につき)	明治4.5.20	岩村清兵衛→臼杵御藩飛驒在生
96	覚(石清水八幡宮初穂料受取)(明治4)	辛未.8.14	岩本直麿内加藤美継→伏水岩村清兵衛
97	覚(葬式入用銀返却につき)	辰.6.22	牧田→岩村
98	覚(金子受取)	巳.2.10	小山・岩新→清兵衛
99	覚(金子受取)	巳.12.17	近江屋吉蔵→上
100	(金子送り状)	1.29	よこた→肥後屋清兵衛
101	(書状)	3.23	永嶺禎次郎→肥後屋清兵衛
102	御達写(松屋惣八滞金につき)	4.24	永峯禎次郎→塩飽屋清右衛門・塩飽屋常七
103	(書状)	4.27	筒井新一・同惣八→岩村清兵衛

番号	資料名	年月日	備 考
54	差入申一札(漁業下受につき)安政3.1		相楽郡菱田村近江屋嘉右衛門→四ヶ郷漁師御出役中
55	差入申一札(漁業下受につき)安政3.3		吐師村庄屋・年寄→四ヶ郷御漁師方御出役中
56	為取替一札(漁業下受につき)安政3.3		弾正町漁師・三栖村漁師・小倉村漁師・一口村漁師→椿井村
57	為取替一札(漁業下受につき)安政3.3		木津村庄屋惣代庄五郎→四ヶ郷漁師方御出役中
58	為取替一札(漁業下受につき)安政3.3		相楽郡祝園村庄屋藤兵衛他→四ヶ郷御漁師方御出役中
59	為取替一札(漁業下受につき)安政3.3		菅井村庄屋久左衛門他→四ヶ郷御漁師方御出役中
60	為取替一札(漁業下受につき)安政3.3		北河原村庄屋嘉十郎他→四ヶ郷御漁師方御出役中
61	為取替一札(漁業下受につき)安政3.3		相楽郡上粕村・加茂村・法花寺野村・銭司村・切山村・北笠置村・南笠置村、右七ヶ村引受加茂村庄屋・年寄、南笠置村庄屋・年寄、上粕村庄屋・年寄→四箇郷漁師方御出役中 包
62	請取銀子之事(伊勢田村等足銀)安政3.12		地方役所→弾正町・一口村・小倉村漁師年寄
63	請取銀子之事(水鳥運上銀))万延1.12	地方	向島村・六地藏村分
64	請取銀子之事(水鳥運上口銀)万延1.12	地方	向島村・六地藏村分
65	請取銀子之事(伊勢田村等足銀)慶応2.12	地方	→弾正町・一口村・小倉村漁師年寄
66	請取銀子之事(伊勢田村等足銀)慶応3.12	地方	→弾正町・一口村・小倉村漁師年寄
67	覚(伊勢田村等渡分)	明治2.8.4	伏水京都府出張所内大年寄→三ヶ郷漁師仲ヶ間
68	(金子受領書)	(明治3)庚午.12.8	町方勘定場→平戸漁師仲ヶ間
69	未年金納(木津川筋魚鳥獵運上)(明治4)辛未.12.22		京都府→伏水弾正町惣代
70	覚(漁師網役運上銀等)	丑.12.15	岡田健次郎・大嶋勘右衛門→弾正町・三栖村・一口村・小倉村漁師年寄
71	(株仲ヶ間解放勝手漁業停止につき)寅.5	豊後	
72	触状(漁方絵図等江戸表より仰付につき)	巳.8.19	東一口村漁師年寄八右衛門→弾正町・小倉村右村々漁師年寄中
73	覚(船税受領)	未.6.17	伏見船惣代→向島漁師仲ヶ間年寄
74	御用追触(休泊につき)	未.10.24	中田廉助他→中山道沓掛宿より東海道草津宿、京都伏見迄夫より城州久世郡伊勢田村外壺ヶ村・紀伊郡伏見弾正町・久世郡一口村外壺ヶ村、右宿村